

國學院大學学術情報リポジトリ

魂呼び儀礼の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 慶一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001555

魂呼び儀礼の研究

Research on a Rite of *Tamayobi*

鈴木 慶一

要旨

魂呼びは今日殆ど見ることがない習俗である。文献上では、平安時代の『小右記』に記されているが東アジアの類似儀礼として、中国では『三禮』に記されている。魂呼びが民俗学上はじめて取り上げられたのは、柳田國男によってであったが、その後総合的な分析には至っていなかった。今回の研究は全国の事例を通観し、併せて発表者の調査を加え、これを元に魂呼びの実態を明らかにするものである。重要な検討項目として、どのような状況の時、どのような作法で、誰が、何を目的に行い、その社会的意義は何なのかという点に絞って各事例を子細に分析した。魂呼びが行われる原因は様々で画的ではない。病因としては難産の場合が多く、また年齢層的には若者重視などいくつかの傾向がみられる。呼ぶ場所は主として屋根、枕元、井戸があるが、呼ぶ原因、呼ぶ人、呼ぶ対象者などにより呼ぶ場所にも傾向が認められた。魂呼びを行う人は身内以外にも近隣の人が加わったり、またお千度詣りが伴うこともあるなど、地域社会の中での共同性が認められた。蘇り期待の傾向が全般的に認められ様々な作法が見られた。この蘇り重視の反映として呼ぶタイミングが生死の境という傾向が確認できた。諸状況から、魂呼びには当該地域での結束力を強める統合機能があるとの結論に至った。

摘要

“魂呼び”（叫魂）是现在几乎看不见的习俗，从文献上看，虽然平安时代的《小右记》有记述，但作为东亚的类似仪式，早在中国的《三礼》中就已记载。民俗学上首先提到“魂呼び”的是柳田国男，但他并未展开综合性的分析。本文通观日本全国的事例，并结合作者的调查，以此为基础，探明“魂呼び”之实态。笔者集中就在何种状态下，以何种方法，由谁、因何目的举行

キーワード：人 場所 生死の境 蘇り 共同社会

关键词：人 場所 生死之境 复苏 共同社会

“魂呼び”等重要研究内容做深入分析，并探讨其社会意义。“魂呼び”的原因多种多样，不一而足。作为病因，一般认为有几个倾向，即以难产的情况居多，并在年龄层上多重视年轻人。“魂呼び”的地点，一般认为主要有屋顶，枕边，井旁，另外因“魂呼び”的原因、呼魂之人，被呼之人的不同，“魂呼び”的地点也会有所不同。“魂呼び”之人除亲属外，也有近邻，另外有时会伴随着“千次参拜”，一般认为这一仪式在地区共同体中具有共同性。“魂呼び”普遍认为具有期待复苏的倾向，且可见各种举行方法。“魂呼び”的时机作为这种重视复苏的反映，被证实有在灵魂徘徊于生死之境时举行呼魂的倾向。从诸多情况来看，我们可以得出：“魂呼び”有增强该地区凝聚力的聚集功能。

はじめに

魂呼びは今日殆ど見ることがない習俗である。その目的は人間が生死の境に臨んだ状態を、靈魂が身体から遊離することにより死亡の危機に見舞われていると考え、その遊離した魂を身体に呼び返すため、大声でその人の名を呼ぶなどして、蘇らせようとする事にある。伝承として所定の作法が存在しておりこれは儀礼的なものとして考えられるが、貴人を対象とした殯のように葬儀の中に位置付けられているものではない。

文献上では、平安時代中期の『小右記』に、屋根の上からの魂呼びが行われていたことが記されているが、類似の儀礼としての招魂が、中国では『礼記』等の文献に記されている。また、東アジアでは他に韓国にも似たような習俗がみられる。

民俗学上はじめて魂呼びが取り上げられたのは、柳田國男の「葬制沿革史料」（1934）の中であるが、この儀礼の詳細はこの時点では報告事例が少なく十分な検討は加えられていなかった⁽¹⁾。事例としては「病人断末魔に近づくとき、彼と一番近い者、親ならば子、夫であったら妻が、大きな声で其名を呼ぶ」「人が死にかかった時、其家の屋の棟に登って一升杓を伏せ、棒切れなどを以て敲く」の2事例が、前者はモトツケル、後者はマスウチという名称で取り上げられ解説されている。これだけで魂呼びがどのようなものであったかを語ることはもちろん出来ない。

具体的に詳細が捉えられてくるのは、これ以降となる。1952年の井之口章

(1) 柳田國男「葬制沿革史料」『定本柳田国男集』第15巻 筑摩書房 1969 522～523頁

次の「魂よばひ」⁽²⁾ではおよそ 100 事例を元に実態のあらましが捉えられ、研究の方向付けが果たされたが、その後の研究は進展していなかった。そこで筆者は全国の事例を通観するとともに実地調査を加えて現時点までに 866 事例を確認し、これを元に分析を行い、本稿において魂呼びとについて、これが行われる原因、行う者などについて検討するものである。あわせて、今後の東アジアにおける比較研究に備えて初めに中国の魂呼び事例についても触れておく。

現代社会では、魂を信じることが、日常から遠ざけられている。しかし一方では、臨死体験が注目されるなど、霊魂論は時代を超えて重要なテーマとして、相変わらずその位置を占めている。霊魂観を考える上で、魂呼びは有力な手がかりを与えてくれるはずであり、この民俗事象は、その記憶が残されているうちに、可能な限り明らかにしておくことが必要と考えている。

1 中国における魂呼び「復」について

中国の招魂儀礼については、蔡文高の「招魂儀礼から見る漢族の死生観」によると『三礼』に「復」と呼ばれる招魂儀礼に関する記録が残されていて、その影響が遼寧省遼陽や四川省、山東省などで死亡直後におこなわれる招魂儀礼に残されているようだとしている⁽³⁾。

この「復」について『礼記』の内容の一部まとめると次のようになる。

○病人を北の窓の下に頭を東にして寝かせる。○死者の口と鼻の上に新しい綿を置いて息の絶えるのを察知する。○死者の側近がしかるべき礼服を着用して、東側の軒から登って屋根の中央の棟の上に跨って立ち、北を向いて三たび死者に呼びかける。次に衣服を丸めて前方へ投げ落とす。吏員がそれを受け止める。魂呼びの礼を行なった者は西北の軒から降りる⁽⁴⁾。

この内容は当然中国の葬送の習俗として知られてきたことと思われるが、重要なポイントとしては、「復」では死を迎える前から準備が始められ、死亡の確認をしかるべき方法で行い、その後、屋根の上で招魂儀礼を行っているのである。

(2) 井之口章次「魂よばひ」『民俗学研究』第 3 輯 日本民俗学会 1952

(3) 蔡文高「招魂儀礼から見る漢族の死生観」『死の儀法』ミネルヴァ書房 2008

(4) 市原亨吉 今井清 鈴木隆一『礼記』下 集英社、1976 5～9 頁

なお、「復」については『儀礼』⁽⁵⁾や『周礼』にもほぼ同様の作法が記されている。

以下中国の近代以降の魂呼び儀礼の若干の事例について確認する。

①河南省開封地区密県志

正常死の時死亡直後、正室へ移して屋根に登って衣服を持って大声で叫ぶ⁽⁶⁾。

②河南省洛陽地区河南府志

正常死の時死亡直後には必ず正室に移して、衣服を持って其処に座り戻れという。今は屋根に昇らない。敢えて名は呼ばない⁽⁷⁾。

③四川省樂山地区眉山県志

親が死亡したばかりの時、屋根瓦を竿で破らせ3回「出」と言う。復魂の意味である。蘇らなければ葬儀を始める⁽⁸⁾。

④福建省 厦門

嬰兒が瘡癰に襲われたとき家の屋根でその嬰兒の衣服を取り付けた竹竿を振り回しながら「家へお帰り」と何度も叫んだ。家の他の人は銅鑼を叩く⁽⁹⁾。

⑤天津市静海県志

昔の人は必ず正室において、死ぬとすぐ<復>魂を呼んだ⁽¹⁰⁾。

⑥山東省惠民地区青城県志

鼻孔に綿を置いた時(臨終) 親族一人が屋根に上がって叫ぶ。叫魂「○○家に帰れ」 数分後降りる。⁽¹¹⁾。

出典は①～③及び⑤⑥は『中国地方志民俗資料彙編』で、④はデ・ホーロトの『中国宗教制度』による。出典の年代を見ると 1779 年～1944 年の出版

(5) 池田末利 『儀礼』IV 東海大学出版会 1973 6 頁

(6) 中国地方志民俗資料彙編・中南卷(上) 丁世良, 趙放主编 北京第1版。书目文献出版社, 1989 P42 民国12年鉛印本(1923)

(7) 中国地方志民俗資料彙編・中南卷(上) 丁世良, 趙放主编 北京第1版。书目文献出版社, 1989 P255 清乾隆44年刻本(1779)

(8) 中国地方志民俗資料彙編・西南卷(上) 丁世良, 趙放主编 北京第1版。书目文献出版社, 1989 P184 民国20年鉛印本(1931)

(9) デ・ホーロト『中国宗教制度』清水金二郎, 荻野目博道共訳 大雅堂, 1946

(10) 中国地方志民俗資料彙編・華北卷 丁世良, 趙放主编 北京第1版。书目文献出版社 1939 P67 民国23年鉛印本[1934]

(11) 中国地方志民俗資料彙編・華東卷上 丁世良, 趙放主编 北京第1版。书目文献出版社, 1989 P178 民国24年鉛印本(1935)

物であり、事例には年代差があつて一律的には扱えないが、日本と大差なく近年まで魂呼びがおこなわれていたことはうかがえる。

死に直面しての儀礼をみると部屋を移す、というのが3事例ある。これは『礼記』に記載されている内容と同一で、しかるべき人に対してのみ儀礼が行われるという事と、正常死に対してのみ行われるという事になる。ここでいう正常死とは、地域差があるようではあるが、例えば蔡文高の「招魂儀礼から見る漢族の死生観」によると、福建省西部の事例の中で「歳が還暦以上で、子孫がいて、しかも自・他殺や疫病でなく、女性は難産でない在宅死を指す」⁽¹²⁾としている。後述するが日本では難産の女性や、還暦前の若者を対象とした魂呼びが多くみられ、比較上大きな相違点のひとつと言えよう。

呼ぶタイミングとしては④の嬰兒の痙攣の事例を除きすべて死亡後である。その内、死亡直後が4事例となっているが、他の諸事例や、招魂儀礼の趣旨から判断すると、中国の場合、呼ぶタイミングは生死の境ということではなく、あくまで死亡が前提となっていたと捉えることができよう。

名前を呼ぶ場所は基本的には屋根である。但し、②のように以前は屋根で呼んでいたが今は屋根に上らないというように近代になって変化したものもある。また、③の事例のように屋根に穴を穿つ方法が一部にみられる点も興味深い。呼ぶ様態では、衣服を使用した事例が3件みられるが、これも古来からの「復」の形式が残されているようである。また、呼ぶ人は記載されないことが多いが、⑥のように単独が多いようである。中には長男或いは長孫というのものもある。

以上6例をみてきたが、実態の一部を検証しただけで全体を対象としたわけではない。しかし『中国地方志民俗資料彙編』に掲載されている「復」と思われる26事例はいずれも類似している。

2 日本の文献上に見られる魂呼び

明らかに魂呼びと思われる儀礼があったことは『小右記』に記されている。『小右記』万寿2年(1025年)8月7日の条に、「昨夜風雨間、陰陽師常盛右衛門尉惟孝、昇東対上^{尚侍住所}魂呼、近代不聞事也」⁽¹³⁾とある。

(12) 蔡文高「招魂儀礼から見る漢族の死生観」『死の儀法』ミネルヴァ書房 2008 47 頁

(13) 東京大学史料編纂所編纂『小右記』岩波書店 1959 116 頁

この記載は、時の権力者である藤原道長の娘で、敦賀親王（後の後朱雀天皇）の妃となった藤原嬉子が19歳で亡くなった時の出来事である。嬉子の住んでいた所の上(屋根)で、東から昇ったという点から中国の『礼記』と類似した作法が窺える。また、以前は行われていたが、近頃ではもう行われなくなった儀礼であるとの認識が見られる。

この出来事の状況は『左経記』にも記されている。『左経記』の万寿2年8月23日の条で、「去5日夜尚侍殿薨之時、依播磨守泰通朝臣仰、上東門対上、以尚侍殿御衣、修魂喚」⁽¹⁴⁾とある。

ここでは嬉子の衣服を用いて魂呼びを行ったことも記されている。この件について当時の様子を細かく記した『栄花物語』巻26には次のように著されている。

日ごろ赤瘡よりしてうちつづき御物の怪のゆゆしかりつれば、いみじう弱らせたまへるに、物もつゆきこしめさず御物の怪その後音なく、皆人たゆみたり(中略)されどすべて限りになり果てさせたまひぬ。御年十九あないみじ、あさましと思しめす。殿の御前はやがてさし退て、あさましく臥させたまひぬ。主計助守道、おはします対の上に、御衣を持て上りて、よろづを申しつづけ招きたてまつる。すべて限りにおはしませば、おほかた殿ばら「たゆむなたゆむな」と僧たちをも頼もう言ひおこなはせたまへば(中略)一昨日男御子生まれたまひて、世ののしり、めでたう内まで聞こしめして、うらやましげに思しめされたり。今日かく思ひがけぬ夢を御覧じて騒ぐは心憂きわざかな。⁽¹⁵⁾

嬉子が体調を崩したのは、はしかに罹り、物の怪が影響したのではないかとしている。いわば急病である。臨終後直ちに「よろづを申しつづけ招きたてまつる」と、いわゆる魂呼びが行われ、これに対して僧を含めた周りものが最後の頼みとしている様子が窺える。また、この事件は嬉子が出産した3日目の出来事ということになる。

3 日本各地の伝承事例の検討

(1) 魂呼びを行う場所 <屋根・枕元・井戸・その他>

① 静岡県中伊豆町原保 病人が危篤の時、屋根で呼ぶ⁽¹⁶⁾。

(14) 増補史料大成刊行会編『左経記』臨川書店 1965 152頁

(15) 山中裕 秋山虔 池田尚隆 福長進『栄花物語』小学館 1997 504～509頁

(16) 静岡県 静岡県史 民俗1 1989

呼ぶ場所で最も事例数の多いのが屋根で、ほぼ全国各地に見られる。

- ② 沖縄県石垣市川平 もうダメと思ったとき枕元で大声で呼ぶ⁽¹⁷⁾。

枕元も屋根に次いで多く、やはり全国各地に見られる。

- ③ 山口県大島郡東和町 臨終の時井戸の中をのぞきながら呼ぶ⁽¹⁸⁾。

井戸も事例数が多い。しかし分布の範囲が殆ど東日本を中心とした本州内に限られている。

- ④ 岡山県真庭郡落合町

危篤状態の時、水神様の所で近所の何人かで呼ぶ⁽¹⁹⁾。

全国の事例から魂呼びを行う場所をポイントにして4例をあげたが、ここにあるように魂呼びの場としては屋根、枕元、井戸という例が多くある。この中の④の岡山県落合町の水神様は、山あいの狭い場所にある。かつて村は井戸に頼っていて、大切にされていたが、やがて水道工事が実施されるに至り埋め立てられてしまった。現在は道路の脇にその跡が水神様として大切にされているとのことであった。従って魂呼びはもともと井戸で行われていたが、同じ場所で水神様に代わったということで井戸の変形といえよう。

水神様でというのは今となっては例外的ともいえるのであるが、魂呼びの場としては屋根、枕元、井戸の他に池、海、沼、庭、戸口、木の上、墓地、村中、道、門先などがある。ただしこれらは事例数としては少ない。

魂呼びの分布は全国各地に幅広くみられ、その場は前述のように屋根、枕元、井戸の3か所いずれかで行われるのが殆どである。しかし、屋根、枕元、井戸という場所を伝承地ごとにみていくと、これらのいずれかで行う場合、屋根と枕元で行う場合、屋根と井戸で行う場合、井戸と枕元で行なう場合、3か所すべてで行っている場合があり必ずしも1か所に限定されていない。このなかでも屋根と枕元の両方で行う例から、井之口章次は、その根拠を明確にしていないが枕元で行うのは屋根で行なわれた作法が変化したものとの見解をとっている。このような呼ぶ場所の重複や例外的な呼ぶ場所等の問題については、全体の分布上の地域関係からの検討が必要であり、稿を改めて検討したい。

(17)筆者調査 2012 年8月

(18)宮本常一 岡本定 東和町誌 東和町 1982

(19)落合町史編纂委員会編纂 落合町史民俗編 落合町 1980

(2) 魂呼びが行われる原因

- ① 大分県宇佐郡安心院町 難産で気を失うと屋根で夫が鞍に乗って呼ぶ⁽²⁰⁾。

魂呼びが行われる原因は様々ではあるが、難産は最も多くの事例が数えられ、殆ど全国的に分布している。呼ぶ場所は屋根が多く枕元や井戸は少ない。

- ② 香川県高松市三谷町 突然人が死んだとき 屋根で瓦をはぐり、西に向かって3度呼ぶ⁽²¹⁾。

魂急死や事故死は緊急事態の発生に対応する方法として、呪術的效果を期待して魂呼びが行われていたことのひとつの表れとも受け止められる。要するに葬儀の一環の中で捉えられているのではなく、何かの事態に対応して行われた傾向が窺えるのである。呼ぶ場所はやはり屋根が多く枕元は少ない。

- ③ 埼玉県加須市 子供がひきつけた時、井戸に向かって親戚のオジが呼んだ⁽²²⁾。

子供のひきつけ時に呼ぶ場所は井戸が多い。数的には屋根も多いが、屋根は全体の数自体が多く、井戸の3倍以上あるので、割合から見れば井戸の方が率は高くなる。枕元は殆ど見られない。

- ④ 山梨県塩山市 病人が最期するとき 枕元で⁽²³⁾。

枕元で呼ぶ事例は病気の場合が多い。屋根や井戸もみられるが傾向としては枕元が多数を占めている。緊急性が少なくあらかじめ事態の推移が予測できるような状況が多いのではないかと考えられる。

- ⑤ 長野県駒ヶ根市中沢中山 無理死にや若い人が死にそうになった時 屋根で⁽²⁴⁾。

無理死は全体の中でこの1例だけである。ここで確認したいのは、社会的に問題のある死であっても場合によっては魂呼びを行う対象とする点である。

- ⑥ 高知県幡多郡三原村広野 若い者が死んだ時や山、川で不慮の死にあって

(20) 大分県史料刊行会編纂 『民俗資料』 大分県立教育研究所 1962

(21) 市原輝士 藤丸昭 坂本正夫 森正史 『四国の葬送・墓制』 明玄書房, 1979

(22) 筆者調査 2012年7月

(23) 塩山市史編さん委員会編塩山市史通史編下 塩山市 1989

(24) 長野県史刊行会, 1988. 長野県編 長野県史民俗編南信地方

た時、屋根で何人かで呼ぶ⁽²⁵⁾。

事故死は川で子供が溺れた時などがあり全体では 14 件確認出来、屋根を中心に、また井戸などでも行われている。

- ⑦福岡県嘉穂郡稲築町 息をひきとろうとする時、屋根等高い所で呼ぶが、年寄りにはやらない。若い人には呼ぶ⁽²⁶⁾。

原因別に呼ぶ場所に傾向がみられると共に、原因とは無関係に年齢的に呼ばないことがあるという事例である。全体的に若年層を主として対象にし、年配者は行わないという傾向が強い。このことは難産や急病急死、事故などが対象になりやすく、屋根や井戸で呼ばれることが多いことを表しているとも言えよう。

- ⑧栃木県小山市 死に至ろうとする時、井戸で呼ぶが、産に依る死や若い人の死には行わない⁽²⁷⁾。

上記⑦と全く逆の事例で、全体で僅か 1 件のみである。魂呼びが若者中心であるが、これは逆のケースである。

- ⑨長野県南安曇郡安曇村 崖から落ちて行方不明のとき屋根板を剥いで穴をあけて呼ぶ⁽²⁸⁾。

この場合本人がいない所で呼ぶことになり、神隠し対策に近い一面が窺える。

- ⑩高知県幡多郡三原村広野 若い者が死んだ時や山、川で不慮の死にあった時、屋根で何人かで呼ぶ⁽²⁹⁾。

遭難関係で、本人がどのような状況か分からないので推測となるが、もしも本人が見つからない状態で行われているのならば、神隠し対策に近く、また遭難現場で命の危機に見舞われている状況でも、神隠し対策の一環に近いのではないかと考えられる。このことから、魂呼びは必ずしも孤立した習俗ではなく、他の呪術的行為と何らかの関連性を持ちながら伝承されてきたことを窺わせている。

(25)市原 輝士藤丸昭 坂本正夫 森正史『四国の葬送・墓制』明玄書房、1979

(26)稲築町史編集委員会編 稲築町史下巻 稲築町 2004

(27)小山市史編さん委員会編 小山市史民俗編 小山市 1978

(28)安曇村誌編纂委員会編 安曇村誌第 4 巻 安曇村 1998

(29)市原 輝士藤丸昭 坂本正夫 森正史『四国の葬送・墓制』明玄書房 1979

どのような場合に魂呼びを行うのかについて、全国から 10 事例をあげて各事例に検討を加えた。呼ぶ対象が原因別に選択される傾向があることが確認できるが、このことを現時点までに収集した 866 事例全体でみると表 1 のようになる。魂呼びを行う時の状況については、病気でというように具体的な原因が必ずしも記されてはいないが、明記されている事例としては最も多いのは難産の 108 例で、次に多いのが病気の 74、急死・事故の 65 例となっている。また、子供の場合は 38 例あるが、その殆どが急病か事故の類となっていて、そのうちでも特にひきつけが多い。魂呼びが行われる原因別に内容を検討すると、上述のように原因別に呼ぶ場所が違っている傾向にあるのが指摘できる。その場所の違いというのは、傾向として緊急性に応じて屋根、井戸、枕元の順になっていることが窺える。また年齢層により呼ぶ対象にするか否かという選択が行われていたらしいことも指摘できる。なお、収集事例のうち、呼ぶ原因が不明であるのは 597 例あるが、この中では枕元が最も多く、次いで屋根となっており、井戸もかなりある。どのようなことで魂呼びを行うのかは不明だが、この事例数の傾向は病死に臨んだ時の呼ぶ場所と同様な傾向である。また原因が不明な事例では、状況表現としては病気時によく使われている「息を引き取るとき」とか「死にそうになると」といったものが多いことを付言しておく。

表 1 原因別呼ぶ場所内訳

原因	屋根	枕元	井戸	その他	計	事例割合
難産	79	4	10	15	108	34%
急死・事故	49	6	7	3	65	20
子供	24	1	9	4	38	12
病気	23	29	12	10	74	23
若者死	23	3	3	1	30	9
老人死	0	3	0	0	3	1
不明他	214	217	78	88	597	
計	412	263	119	121	915	100

重複カウントあり。

(3)魂呼びを行う者

①青森県下北郡東通村目名

お産の時、生死の境になると、屋根上で恐山の方角に向かって「○○さん、まだいくなーもどってこい」と親類の男性複数で呼ぶ⁽³⁰⁾。

最も事例数の多い屋根上で呼ぶ場合、女性が呼ぶ、というのは殆ど見られない。これは高所に上ること自体が女性には難しいためではないかと考えられ、特に深い意味はなさそうである。当事例での親類の男性複数というのは、恐山に向かって呼んでいるところから、大声で声を届けようという意図もあったのかもしれない。

②群馬県北群馬郡榛東村

病人が息を引き取る瞬間入れ替わり立ち替わり近所の人が井戸に向かって呼ぶ⁽³¹⁾。

群馬県は井戸を呼ぶ場所とする事例が多い地域である。ここで注目したいのは呼ぶ人に親族が含まれていない点である。特に親族を排除しているというのではなく、呼ぶ主体が近所の人ということであろう。

③岩手県宮古市 親戚や近所の人が枕元で呼ぶ⁽³²⁾。

枕元なので呼ぶ人の中には当然家族も含まれていると思われるが、それにも拘らず積極的に近所の人に参加している点には注意したい。

④群馬県吾妻郡高山村

亡くなりそうな時、屋根で近親者が呼ぶ、と共に近所の人が千度詣りを行う⁽³³⁾。

この事例では魂呼びによる身内の蘇り祈願と、近隣者による祈願が同時並行の状況で行われている。このように地域内で危機に見舞われた人がいた場合、人々が共同祈願のお百度詣りやお千度詣りをする習俗は福島、栃木、山梨、長野、岡山県など各地にも見られる。その趣旨は「若くて死を惜しまれるような人の場合に行われ、ある程度年齢のいつている人の場合は、見舞い程度に止めて命乞いは行わない」(沼田市)というように魂呼びとの類似点が見られる点は興味深い。

(30) 国土地理協会 日本民俗地 VII(葬制・墓制) 文化庁1980

(31) 群馬県教育委員会編集 群馬県教育委員会事務局 1964

(32) 宮古市教育委員会編 宮古市史民俗編上宮古市 1994

(33) 板橋春夫『誕生と死の民俗学』吉川弘文館 2007

誰が魂呼びを行うのかに焦点をあて、4つの事例をあげ、若干の分析を加えたが、魂呼びを行う者は「身内のみ」、「他人」、「身内と他人両方」という3つに分けることができる。

行う者が明確な事例は収集した中に297例がありこの中では①のように親類の男性複数というような、親族が行うというのが207例と最も多い。また、②のような「他人」が呼ぶケースは31例、③のような「身内と他人両方」で行うのが59例であった。行う者と魂呼びの場所を組み合わせると表2のようになり、屋根の上では「他人」及び「身内と他人両方」参加の合計は131例中58例であり、屋根の上で行う場合の半数近くになる。また枕元では「他人」及び「身内と他人両方」参加は20例、井戸で行う場合は「他人」及び「身内と他人両方」で8例であった。身内だけで行う場合は枕元が多く79例、屋根の上が73例、井戸が29例であった。単純に比較すれば枕元では身内のみが圧倒的に多いが、屋根となると他人が関与する割合がほぼ半数に近くなる。ここにこの習俗が地域社会の中でしっかり受け継がれてきた一端が窺える。その典型例のひとつとして④が挙げられよう。この例では魂呼びによる身内の蘇り祈願と、近隣者による祈願が同時並行で行われている。

表2 誰が呼ぶのか

	屋根	枕元	井戸	不明	計	%
身内のみ	73	79	29	26	207	70
身内と他人	34	17	4	4	59	20
他人のみ	24	3	4	0	31	10
計	131	99	37	30	297	100

(4)魂呼びを行う時機

<死亡前>

- ① 佐賀県唐津市神集島 近親者が臨終に枕元で揺り動かして呼ぶ⁽³⁴⁾。
- ② 長野県下伊那郡松川町生田村
死にそうになると屋根に上り穴を開け、下に向かってもどれ、と呼ぶ⁽³⁵⁾。

(34) 中村正夫 安田宗生 市場直次郎 田中熊雄 山口麻太郎 水流郁郎『九州の葬送、墓制』明玄書房、1979

(35) 国学院大学民俗学研究会『民俗探訪』1969

③ 福井県三方上中郡三方町遊子

難産で人事不省になると家の者が屋根に上って番傘をさして、或は着ていた着物を持って振りまわす⁽³⁶⁾。

④ 群馬県 太田市 こどもがひきつけたとき、井戸で親兄弟が呼ぶ⁽³⁷⁾。

日本の魂呼びでは伝承では殆どが死亡前後で死亡後とはなっていない。ここでみられる「臨終」あるいは「死にそうになると」などは死亡前の範囲内であろう。このような死亡前のタイミングはかなり多く全体の8割近くを占めている。

<死亡後>

⑤ 和歌山県西牟婁川郡大塔村 人が死ぬと、屋根で「おーい、おーい」と呼ぶ⁽³⁸⁾。

⑥ 宮城県加美郡色麻町 医者がそれとなく伝えると枕元で呼ぶ⁽³⁹⁾。

⑦ 岡山県邑久郡長船町 子供が死んだとき 屋根で「もどってけえ」⁽⁴⁰⁾。

⑧ 東京都世田谷区上北沢 急に人が亡くなった時井戸で⁽⁴¹⁾

⑨ 縄県伊是名村諸見 死が確認されると周りの親類の人が枕元で呼ぶ⁽⁴²⁾。

⑩ 沖縄県津堅島 心臓がとまってから枕元で⁽⁴³⁾。

⑪ 沖縄県波照間島 葬式当日 外庭に向かって⁽⁴⁴⁾。

これらは明らかに死亡後に行っている例であり、147例が確認出来ている。ただし、この死亡後という報告例は表現の曖昧さがある。⑧のような「急に人が亡くなった時」や⑦のような「子供が死んだとき」というのはタイミングなのか、過去の状況なのか不明確であり、本来は除外すべきかもしれないが、死亡後として位置付けた。したがって厳密に死亡後と判る事例となるとさらに少なくなり、⑥のような「医者がそれとなく伝えると」と、はっきり死亡後と確認できるのは29例となってしまう。しかもこのように明確に死亡後と判るのは⑨～⑪のように沖縄に多い。

以上みてきたように、子細に検討すると死亡後がかなり少なくなってしまう

(36) 福井県編 福井県史資料編 15 民俗 1984

(37) 太田市編 太田市史通史編民俗 太田市 1984

(38) 国学院大学民俗学研究会 『民俗探訪』1976

(39) 色麻町史編纂委員会編 色麻町史 色麻町 1979

(40) 長船町史編纂委員会編 長船町史民俗編 長船町 1995

(41) 東京都教育庁社会教育部文化課 東京の民俗2 1985

(42) 名嘉真直勝、恵原義盛共著『沖縄奄美の葬送墓制』明玄書房 1979

(43) 筆者調査 2012 年5月

(44) 赤田光男 『祖霊信仰と他界観』 人文書院 1986

うが、そもそも死亡前、死亡後ということが結果でしかなく、その場面では何とか蘇らせようとした「生死の境」のタイミングであったというのが実態だったのではないかと考えられる。したがって魂呼びは死亡後に改まって行われる類のものではなかったと考えられる。この魂呼びが数字の上では主として死亡前に行われていたという事象は重要なポイントと考えられる。従来、魂呼びを論じる際、死亡前なのか死亡後なのか取り違えられていたり、あるいは注意を払っていなかったため、論点にズレが生じていると思われるケースが見られるからである。例えば中村康隆は「『魂呼び』というのは、ひとの死後、その名を呼んで魂をよびもどす習俗をさしている。(中略)したがって死者の再生・甦りの呪術ではなかったはずである。(中略)本来それは、死によって遠く離れ去った魂を呼び戻し、これを迎えて葬儀をいとなむために行なう『招魂』の儀礼とこそ解すべきであろう」という⁽⁴⁵⁾。論の展開は首尾一貫しているのだが、初めに魂呼びは死後に行なわれるものと決めつけてしまい、蘇りを軽視し、方向違いの論の展開となってしまう。

(5)魂呼びの使用道具

- ① 愛媛県宇摩郡新宮村 屋根に上り枡を下に向け底を叩きながら呼ぶ⁽⁴⁶⁾。
- ② 静岡県賀茂郡南崎村 目を回したとき、屋根に上り箕であふってもどれやもどれや⁽⁴⁷⁾。
- ③ 徳島県海部郡阿部村 お産で死んだ時瓦をめくって少し開け、傘をさして⁽⁴⁸⁾。
- ④ 兵庫県淡路島 近親者が屋根に上り死者が常時着用の衣服を翻して⁽⁴⁹⁾。

道具を使用する場合、呼ぶ場所は殆どが屋根で、枕元や井戸はあまりみられない。最も多く使用される道具は枡で、次に箕、傘、衣服の順となる。

このほかにも種類は多く、道具を使う 137 例をみていくと下記のように全部で 20 種類になる。ここで注目しておきたいのは衣服で、これは近畿地方を中心とした分布状況となっている。

(45) 中村康隆『宗教学小論集』国書刊行会 1978 著者が魂呼びが死亡後に判断した根拠の一つとしてデ・ホロート『中国宗教制度』を上げている。第一巻では中国の靈魂復活の概念について「さまよっている魂を死体の中へも一度這入らせて之を蘇らせる目的で、何度も死体に呼びかけることや(中略)それ故に中国人は決して死を絶対的な現実とは看做さない。生命は魂が肉体を去った後も残存している。魂が肉体の中に再び這入りこみ、復活を生ぜしめるという執拗な希望さえ、遺族は抱えている」と説明されている。

(46) 新宮村誌編纂委員会編集；歴史行政編，自然編，新宮村 新宮村誌 1998。

(47) 井之口章次「魂よばい」民俗学研究所 日本民俗学会編『民俗学研究』日本民俗学会 1952

(48) 井之口章次「魂よばい」民俗学研究所 日本民俗学会編『民俗学研究』日本民俗学会 1952

(49) 井之口章次「魂よばい」民俗学研究所 日本民俗学会編『民俗学研究』日本民俗学会 1952

杓 42、箕 26、傘・笠 15、衣服 11、鉦 7、杓子 5、蓑 5、鍋の蓋 4、鏡 3、お札 3、提灯 3、カマス 2 褌・腰巻 2、鍬 1、篩 1、味噌 1、米 1、糸車 1、鞍 1、鉄砲 1 計 137 例。

(6) 実例検討

以上に検討してきた魂呼びの内容を通して実態の一端を窺うと、魂呼びは、本来的には孤立したものではなく、共同体の中で隣近所を含んだ多くの人々が係わって行われてきたことが判る。呼ぶ人に他人が加わるケースが収集した事例の中では全体の 3 割を占めるのである。また、他人が参加しなくても大声で呼ぶこと自体、隣近所との関わりは必然的で、重要な社会的習俗と位置付けられよう。如何なる意図のもとに行われてきたのかという点では、呼ぶタイミングが生死の境ぎりぎりの場面であるほか、難産や急病、子供のひきつけなどもあり、魂の遊離という観念は死の場面だけではなかったのが分る。

ここで江戸時代の例を挙げ、これまで検討してきた魂呼びについてあらためて確認しておく。

「紀伊国伊都郡慈尊院村慈尊院中橋家文書」には、江戸時代の魂呼びの様子が記されている。珍しく文献に残された例であり、必ずしも一般的とは言えないかもしれないが、当時の状況を知る一つの手掛かりにはなる。『九度山町史』に同史料の内容が次のように解説されている。「中橋英元の長女、品は寛保元（1741）年に生まれた。彼女はあまり体調がすぐれず、九度山村の医者 of 往診をたびたび受け、薬の服用や寺社への祈祷をして療養しながらも順調に生活を送っていた。しかしながら、宝暦 12（1762）年 2 月 21 日、22 歳で『急病急死ハッ半也』となる。すぐに『屋根に上がり呼ぶ人大勢也 畑より東は聞き付け次第にかけ付け候 いしや児玉立伯 坂本実養 ぬか目主 膳おそし 変成哉 異変成哉 悲き哉』と記載されている。つまり、品が息を引き取ると直ちに、おそらく肉親のもの数人が草葺きの屋根の棟へ駆け登り、口をそろえて『品、品、』と四方八方に向かって叫んだものと思われる。それによって村人が大勢集まり嘆き悲しんだ様子がうかがい知れる」⁽⁵⁰⁾ という。ここには江戸時代中期、場所は高野山に近い和歌山県北部での魂呼びの一場面が記されている。対象は若い人であり、原因は長患いのようなが、

(50) 九度山町史編纂委員会編 九度山町史民俗文化財編 九度山町 2000

直接には急病急死で、直後に村の人々が直ちに集まり、屋根上で魂呼びを行っている。場所や呼ぶ人は伝承事例で顕著な屋根上で、身内と他人両方の参加による作法である。屋根にあがって名を呼んだタイミングは不明だが、3人の医者が来るのが「おそし」で、「変成」「異変成」といっているのも、この時に行われた可能性が高い。記録は事後に行われているので、結果的には「急病急死八つ半」ということであろう。紀伊国慈尊院村の近世中期に起きた「品」の死亡記録の内容からは、伝承事例には少なくとも近世から変化せずに行われてきたものが含まれているのは確かである。

4 魂呼びの社会的背景

魂呼びが行われる目的はこれまで検討してきたように蘇りや回復である。しかし、その効果となると非科学的なものであり疑問と言わざるを得ない。ところがこの習俗は相当の長期間にわたって全国各地で伝承されてきており、単なる呪術的効果面だけで受け入れられてきたとは考え難い。そこには何らかの社会的意義や副次的機能のようなものがあつたと考えられる。波平恵美子は、「タマヨバイは本当に蘇生を目的としたものであつたかという、そうではなく『生』と『死』との中間状態の終わりを周囲の人々や、死んだ人に対して示す儀礼であつたことが、タマヨバイを詳細に調べると明らかである。『これだけ名前を呼んでも息をふきかえさないならば、死んでしまったのだ』として、葬式の準備をしたのである」⁽⁵¹⁾と述べて、屋根に上って名前を呼んだり、井戸の中に向かって呼ぶことは普段やらないことで儀礼行為を強調するパフォーマンスである、と指摘している。この見解が妥当かどうかを基準として伝承事例を見ていくことにより、社会的意義について考察する。

① 君津郡周南村、小糸村他

屋根等で呼ぶ。年若な人・産婦・幼児のいる母親（老人は諦める）⁽⁵²⁾。

② 茨城県猿島郡猿島町

(51) 波平恵美子『いのちの文化人類学』新潮社 1996

「普段決してやらないやり方をして、『これは儀礼的行為だ』ということを人々が強調しているともいえる。いずれにしても周囲の人々の注意を大きく喚起し強く印象づけるパフォーマンスであつた」と述べている。

(52) 井之口章次「魂よばい」 民俗学研究所 日本民俗学会編『民俗学研究』日本民俗学会 1952

子供が病気の時井戸で親が呼んだ、成人するまで何回か行われた⁽⁵³⁾。

魂呼びが波平の指摘する「形式重視（パフォーマンス）で葬儀の準備へのステップ」であるという見解が妥当であれば、呼ぶ対象者の社会的地位や経済状態を反映し、形式的であると考えられる。しかし、①のように年寄は呼ぶ対象とはしないというのが10例認められるのに対し、(2)の⑧で述べてきたように若者にはやらないというのは栃木県の1例しか認められなかった。この傾向は表1でも分るが、魂呼びでは若者、女性、子供が死に臨んだ場合を対象としている例が多く、老人を優先的に対象としている例は殆どみられないのである。助かる見込みのない人に形式的にやるのではなく、助かる見込みがあり、また出産など助ける必要性の高い場合、蘇り優先で魂呼びがおこなわれる傾向は明確で、蘇るための最後の手段として行われたと判断できる。また、すべての魂呼びが葬儀の準備に直結するとして良いのかどうか、上記の②のように何回も魂呼びされる子供の例や、収集例の全体の1割強に達している難産も、直ちに死に直結したケースばかりとはいえないのではないか。さらに呼ぶタイミングは、既にみてきたように殆どが生死の境、あるいは生前であり、周囲に伝えている内容は「『生』と『死』との中間状態」なのであり「『生』と『死』との中間状態の終わり」ではないのである。魂呼びは死亡後に行われていた、という誤った認識が形式的に葬儀の準備を周囲に伝えていたという結論を導いたと指摘できよう。

以上の点を踏まえて社会的意義を考えると、魂呼びは大声で呼ぶという行為が伴うことから、当該社会に通知する機能があることは認めてよいと思われる。ポイントは何を伝えたかという点である。死亡後に行われる形式重視であれば「死亡」の通知となるが、実際には生死の境に行われるので、その時点での「家族の健康上の危機」を伝えていると考えられる。その伝達範囲は屋根と井戸や枕元ではやや違ってくると思うが、恐らくは隣近所が中心であろう。そして近隣の者もこの状況に対して可能な限り対応して行こうとする協力者となるのではないだろうか。その具体例としては既に述べた群馬県吾妻郡高山村の魂呼びとお千度詣りの並行実施や、和歌山県九度山の江戸時代の村民参加の魂呼びなどが挙げられよう。この様な当該地域での結束力を強める結果をもたらす統合機能が魂呼びにあり、その結果長く共同社会の中で受け継がれられてきたのではないかと考えられる。

(53)筆者調査 2012 年7月

おわりに

今回の比較分析を通して、魂呼びのいくつかの実態を明らかにできたと考えている。具体的には、

- ・魂呼びが行われる原因は様々で画一的ではない。その中にあって難産の場合が多く、また若者重視などいくつかの傾向がみられる。
- ・呼ぶ場所は主として屋根、枕元、井戸があるが、それぞれ一定の傾向があり、呼ぶ原因、呼ぶ人、呼ぶ対象者などにより差があることなどである。
- ・魂呼びを行う人は身内以外にも近隣の人が加わったり、またお千度詣りが伴うこともあるなど、地域社会の中での共同性が認められた。
- ・蘇り期待の傾向が全般的に認められ、様々な作法が見られた。この蘇り重視の反映として呼ぶタイミングが生死の境が多い点は、従来魂呼びが死亡後に行なわれていたのではないとする考えが多かった状況を考えると重要な確認課題となろう。

また、今後の課題も多く残されている。道具を使用する意味や、屋根の上などの作法の意味、招魂等関連習俗など多くは視野を広げ東アジアの中での位置づけが必要と考えられる。その他、領域の検証、変遷、他界観など残された課題は多い。